

畜産流通対策について

最近10年間の畜産の発達は実に目ざましく、「有畜農業」から、今や農業振興の主役の座についた。そして、畜産そのものの性格も、ずいぶん変わった。昔は、「畜産」イコール「家畜の改良」の感さえあった。戦後、漸く畜産の内容も改善され、昭和18年頃、一時農林省畜産局に「有畜営農課」が設けられた、ところが、初めは、いろいろ調査ばかりしていたので、当時、或る会議の席上、口の悪いことで有名な某県の畜産課長が、いみじくも、「有畜営農調査課」と皮肉ったほどである。しかし、このように入念に行なわれた調査から、つぎつぎと新しい施策が生まれ、文字どおり、農業の体質改善のためのキメ手として、畜産が時代の脚光を浴びるようになったことは、前述のとおり。

さて、このように畜産が伸びた結果、農家が直ちに期待どおり栄えたか、という点、いちがいにそうとは言えない。何故か。端的に言って生産物の流通対策が、おろそかにされたためと思われる。農家が経営とか技術とかを改善して、生産コストを下げ、収入をふやすことは、農家自体でできるが、生産過程において幾ら努力しても、流過程が手抜きでは、効果は半減する。この意味で、ここ数年間の畜産物に対する消費流通対策は、畜産行政史のページを飾るものとして、注目に値する。

家畜市場の再編整備

古くからの家畜で、多くの農家に密接に結びついている和牛の取引は、前近代的だと酷評される。

昭和31年6月に公布された家畜取引法は、家畜の取引をガラス張りとし、客観的に見て、価格が公正かつ適正になるよう、家畜市場での取引方法をせりまたは入札とすること、家畜市場を交通の便利なところに、充実した施策をもつ適正規模として、売り手買い手双方とも満足できる取引の場とするため、家畜市場の再編整備を行なうこと、などが主な内容となっている。

新時代にふさわしい法律として、大きな期待をもって迎えられたこの法律の、取引方法の改善についての現状はどうか。特に積極的にこれと取り組んだ岡山県でさえ、率直に言って寒心に耐えない。その理由は何

かという点、いわく理想と現実とのギャップが大きい。家畜商側の積極的な協力が得られない。

これに対処する生産者団体の積極的な改善意欲が今一つ足りない。など幾つかの問題点が列挙される。しかしながら、進化する時代は、早晚、家畜取引の近代化の完成を要請しているということ、関係者が、それぞれの立場から、身をもって等しく体験させられたことは、大きな進歩だと言えよう。

後者の家畜市場の再編整備はどうか。高梁、阿哲、苫田、小田、井原などの各畜連管内は、事情の差こそあれ、産地市場の再編整備を行なって、概ね所期の成果をあげている。中でも、高梁市場の模範的設備は、阿哲畜連と並んで、管内の市場の整備統合と併せて、全国に誇り得る、代表的なものであろう。

なお、家畜取引の近代化のため、ここ2、3年来、県畜連その他生産者の系統機関によって、家畜の共同購入および販売が推し進められている。昨年中の、肉牛の京阪神方面への共同出荷は、まだ僅か500頭にも満たないけれども、肉畜の取引改善のため、大きな力となっている。

枝肉取引の改善

肉に限らず、畜産物は高価なため、安ければ安いほど、潜在需要が、表に現われる。消費がふえてこそ、畜産農家も、消費流通にたずさわる商人も、ともに栄えることができると信じている。と思っている矢先、4月1日から、岡山市では肉の小売りが値上げされた。今の肉畜の値上りでは、これも止むを得ないとは思いますが、好ましいことではない。さて、このような情勢の下で、食肉取引の近代化のために、画期的な計画が進められている。

即ち枝肉による取引方法の確立がそれである。典型的な中都市である岡山市の、食肉の地場消費と、大阪消費市場への枝肉の移出とを目的として、岡山市に枝肉取引施設を設ける計画がある。これには、必然的に近代的な畜場と冷蔵庫とが併設されなければならぬ。

なお、県北の作州一円をバックとして、津山市に、

岡山畜産便り1960.05

適当な規模の同様施設の設置も考えられている。

食鶏と卵の取引改善

ブロイラーの生産は、ここ1・2年急速に伸びて、昨年は約20万羽の生産を見た。新しい産業だけに伸びは速い。また年間80万羽に達する廃鶏の商品化率を高めて、その取引きを改善することは、緊要な問題である。

昨年6月、県養鶏加工農協連が、県経済連の敷地内に290.4㎡のオートメ化した、極めて能率的な（1日の能力2,000羽）食鶏処理場を設けて、県内外から注目を浴びている。昨年6月操業開始この方、年末までに、月平均2万羽を取り扱い、大消費地と直結して、産地として極めて有利に食鶏をさばっていることは、特筆に値する。

卵は、県の畜産物の粗生産額の中で第1位を占め、昨年33.2億円に達したが、この中、約3分の2が阪神市場を主とする県外へ出荷され、その中の半数が、県

経済連を主体として、大阪市場へ系統共販の形で出され、大阪市場では、全体の3割が岡山の卵で占められている。しかし、昨今急速に発達して来た、大都市近郊養鶏に、四つに組んで、渡り合うためには、前途は決して安易なものではない。

幸い、昭和32年に、全国に率先して「岡山県移出鶏卵検査協会」を設けたが、今後さらに、この機能を強化して、卵の自主検査を充実し、大阪での岡山の卵の銘柄を確立することはもちろん、進んで輸出に備えて万全を期さなければならない。